

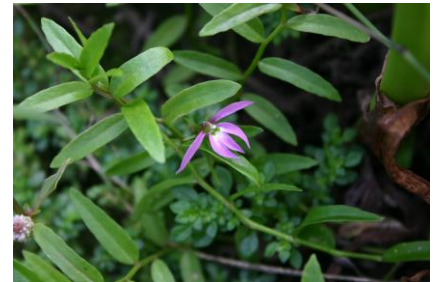


嶺田拓也 (MINETA, Takuya)

主任研究員

博士 (学術)

- 1967 神奈川県生まれ
- 1997 岡山大学大学院自然科学研究科博士課程修了
- 1999 日本学術振興会特別研究員 (PD)
- 2002 (独) 農業工学研究所採用 農村環境部配属
- 2011 農村基盤研究領域 資源評価担当



私の好きな農村の草花
ミゾカクシ(花言葉: 思わせぶり)
田の畦に潜む妖精のようです...

研究者の横顔

< 追いつけていきたいこと... >

“生存闘争”。進化論で有名なC.R.ダーウィンが、
うつせみの生きもののセントラルドグマとして提唱した概念です。

何が正しく、たれが勝者かは時の運。ただ、日々をもがき続け、
生きものとしての本能とヒトとしての性(さが)のはざままで、うつ
ろいときめきを楽しみたい。そんな生き様を追いつけています。

< 私と農業と農村 >

農家ではありませんでしたが、小学生の時分に視聴していた
NHK「明るい農村」(※焼酎の銘柄ではありません)が私の原点
となっています。食べる(生きる)ための業(ごう)としての農。
農や生業を営むための基盤である農村。農に殉ずる覚悟のなか、
業(ぎょう)の中で生物を利用する研究に加え、業(なりわい)を
続けていくために、捨て去りつつあるものの中から新たなきらめきや
価値を拾い直す作業に、ひたむきに取り組みたいと考えています。

< 研究と技術 >

革新的な研究成果でなくても、ローテクな成果の産物であっても
目の前の農家が瞳を輝かせ笑顔を見せてくれることが何より
のご馳走です。また、現状の対応だけでなく、10年後数十年後の
事態に備えた技術開発にも貢献できたとしたらうれしく思います。

< 研究や技術開発のテーマ >

農業や農村は、生産の場としての機能だけでなく、さまざまな
“めぐみ”をもたらし続けています(多面的機能)。農業や農村
が多様な生きものを育むメカニズムや農業や農村の営みに依存する
生きものの特徴のサイエンティフィックな解明が主なテーマです。

特に邪魔者扱いされがちな“雑草”と呼ばれている草花を通じて、
農業や農村に対するイノベーションな意識を市民や農家に提供でき
ればと考えています。

また、農業や農村が有するさまざまな可能性の資源化には、対象とな
りうるものに対し、私たちの認識やコミュニケーションを増進する技術
も必要と考えます。“田んぼの生きもの調査”などを通じ、農業・農村
の有する諸機能のリテラシーを高める技術の開発も課題としています。



年々歳々花相似
田と稲と人と生きものたちの
協働作用で創り出される歳時記



市民による田んぼの生きもの調査
次世代の子どもたちに私たちは
何を継げるのだろうか

